

『江帥集』の構成と成立

A Study on the Gomosochishu

高野瀬 恵子
TAKANOSE Keiko

平安後期、後三条・白河・堀河の三代にわたって活躍した儒者大江匡房の家集である『江帥集』について、筆者は、集に登場する人物についての考察及び歌の詠作年次についての分析を行って、これまでに三つの論文(1)で順次報告してきた。本論文は、過去の三論文では洩れていた集前半部に登場する女房達及び後半部に登場する男性らに関する考察を追加し、これまでの論文内容への一部訂正補足を行って、改めて集全体の構成と成立に関する考察を報告するものである。

1、前半部に登場する女房歌人たち

『江帥集』は、全五三三首であるが、有吉保(2)及び竹下豊(3)等の研究により、前半部(三七四番まで)は、春・夏・秋・冬・釈教・慶賀・羈旅・離別・哀傷・恋・雑に整然と分類、配列されているこ

とが知られている。この前半部に登場する女性のうち、宮仕え女房は八人ほどである。以下にその名と歌とを挙げて考察する。以下、『江帥集』の引用は冷泉家時雨亭文庫本(4)により、適宜、漢字及び読点を当て、オドリ字は仮名に直す。

①伯の母(筑前守高階成順女)

中納言になりたるに、伯の母のもとより

くらゐ山こずゑは高くのぼるともおひその森を思ひ忘るな
かへし

くらゐ山松は木高くなりぬともおひその森はいかが忘れむ

(一五八・一五九)

伯の母は、筑前守高階成順女で、母は伊勢大輔。神祇伯延信王(花山院の孫)の妻となり、神祇伯康資王を産んだことから、伯母、康資王母と呼ばれた。四条宮の許では筑前と称し、寛治年間から康和、長治にかけて歌合等で活躍した女房である。当該贈答の詠作年次

は、匡房が権中納言となつた寛治八(一〇九四)年六月頃となる。

②美作の君(前齋院の美作の君、宮の美作の君、皇后宮の美作の君)

あひしりたる女の五月にうせて、その冬になりて、さきの

齋院のみまさかのきみのとぶらひたるかへりごと

別れにしその五月雨の空よりも雪降ればこそかなしかりけれ

(二七六)

宮のみまさかの君のもとへつかはず、宮よりまかりいでて

ほととぎすみやまをいづる初声を人に知らせで聞くよしもがな

(二一五)

皇后宮のみまさかの君のもとより、千種殿にあたる人のく

じゆるせとて

日をへつつ千種にしげき言の葉を吹きはらはなん風のたよりに

かへし

千種にもかかる言の葉ちりくればしげみも今はあらじとをしれ

(三二一・三二二)

一見すると、複数の「美作の君」がいるように思われるのだが、同

一人物の可能性が高い。

皇后宮美作は、美作守従四位上源資定(村上源氏)女で、母は一説

に出羽弁とも。生没年未詳。次に示す『後拾遺集』一八三番歌詞書

によれば初めは六条齋院祿子内親王(後朱雀天皇皇女)に仕えていた。

祿子内親王賀茂の齋院と聞こえける時、女房にて侍りける

を、年へて、後三条院の御時、齋院に侍りける人のもとに、

昔を思ひ出でて、祭りのかへさの日、神館につかはしける

皇后宮の美作

聞かばやなそのかみ山のほととぎすありし昔のおなじ声かと

(後拾遺・夏・一八三)

美作は、祿子内親王に仕えて、二十五回にわたる「六条齋院祿子内親王家歌合」のうちの二十一回に参加・出詠しており、そのうちの年時のわかる歌合の最後である承暦二(一〇七八)年十月の記録にも名が見えている。ただ、四条宮寛子への出仕の時期については、はっきりしない。「齋院祿子内親王家歌合」には他家の女房も参加していたようであるが、美作の場合はどうだったのだろうか。

祿子内親王が病により齋院を退下したのは天喜六(康平元)(一〇五八)年四月であるが、内親王家歌合は退下後も続いており、美作はその退下後とされる歌合にも途切れず参加し続けている。この状況からは、美作は齋院時代から引き続き祿子内親王家女房であった、「前齋院の美作」と呼ばれていた可能性があると考えるのは不自然でもないだろう。先に引用した『後拾遺集』一八三番歌は、詞書に従えば後三条天皇の在位時(一〇六八〜七二)の詠作となるので、美作はその頃はまだ内親王家女房で、四条宮寛子のもとへ移ったのは承暦二年の「内親王家歌合」以後なのではないだろうか。

「前齋院の美作の君」が登場する『江帥集』一七六番歌は、詞書中の「あひしりたる女」が匡房の妻をさすと考えると、匡房の妻の死が承保四(一〇七七)五月である(5)から、承保四年から承暦元年に改元されるその年の冬頃、匡房が美作からの弔問に対して返歌したと推定することが可能になる。また、四条宮に仕える「美作君」が登場するのは、史料では、『帥記』承暦四(一〇八〇)年七月十五日条で、「次承四條宮、招出美作君、令申故常陸入道文書之事」云々とあるので、この承暦四(一〇八〇)年七月の時点では美作は既に四条宮寛子に仕えていたと考えられる。

また、三二一・三二二の贈答の詞書に見える「千種殿」は、もと村上天皇皇子具平親王の第宅で六条にあり、親王薨後は、頼通親王の女嬪から源師房（親王の子で頼通の養子）へ、師房から師実（師房の女嬪）へと伝領されて、承暦元年十二月十五日に美作守の匡房が師実から買得（6）して、ここに江家代々の書物を収めた（千種文庫）。三二一・三二二番の贈答では、詞書の「千種殿に居たる人」とはどのような人と言うのかについて未詳であるが、「千種殿」関係の贈答は承暦元（二〇七七）年十二月十五日以降のことであろう。

③ 因幡の内侍（因幡守藤原惟綱女）

因幡の内侍のもとへつかはす

神無月空の時雨にこと寄せて人知れずのみ濡るる袖かな

（二八九）

「因幡の内侍」（生年未詳）一三四の名は、堀河天皇側近の掌侍として見える。寛治元（二〇八七）年十二月に掌侍として叙爵しているが、それ以前に源顕房の妾となつて承暦二（二〇七九）年に雅兼を産んだという。『讃岐典侍日記』にも登場する。堀河天皇崩御の後には中宮篤子内親王に仕えた。当該歌の詠作年次は寛治元（二〇八七）年十二月の叙爵以降のこととせらるう。

④ 伊予の内侍（予州の掌侍）

予州掌侍許送之

白波の寄せぬなぎさの浜千鳥跡さへなしと恨みつるかな

（二九〇）

「伊予の内侍」と呼ばれた女性及び詠作年次については、未詳。史料によれば、後三条・白河朝に「伊予采女（越智宿禰永子）」なる女官があり、「永保二（二〇八二）年正月十一日、在任、叙爵を請う」

（『朝野群載』）と見える（『平安時代史事典 資料・索引編』による）ものの、詳細はわからない。

⑤ 四条宮の淡路の君

四条宮のあはぢの君に

下は燃え上はそらなるわが恋や浅間の山のけぶりなるらん

（二九六）

「四条宮の淡路」は四条宮寛子女房の一人であったと思われるが、出自等の詳細は未詳。当該歌の詠作年次も、寛子が立后（永承六年）し、四条大路南（西洞院大路東）の里第にちなんで四条后と称されるようになった以降であろう。

可能性が高いのは、『栄花物語』根合の「皇后宮春秋歌合」に見える女房「淡路」である。

その日になりて、左の人々、春の色々を織りつくしたり。（中略）淡路、梅の三重織物の表着、みな打ちたり。紅の打ちたる、梅の二重文の唐衣。（以下 略）

（新編全集『栄花物語』、三八八頁）

しかし、この「淡路」の出自については二説ある。出自に関する説の一つは、『栄花物語』底本（梅沢本）勘物に見える「淡路少将実季女」とあるもの。新編全集頭注では「実季は藤原公成男と思われるが（分脈、天喜四年にまだ二十二歳。誤脱があるか。」と疑いを示している。

もう一つの出自の説は、『平安時代史事典 資料・索引編』に引かれた「平安要覧」の「後宮表」に、四条宮女房として「藤原某女淡路」とあって、その備考欄に「淡路守定佐の娘か。皇后宮春秋歌合などに出詠（『甘巻本類聚歌合五』、『栄花』）」とある。この備考欄に

従えば藤原定佐女となるが、その「藤原定佐」は、寛弘五(二〇〇八)年に三河権守(『御産部類記』)、寛仁元(二〇一七)年に淡路前司(『小右記』寛仁元年十二月二十六日条)であるという。その人物の女と考えると、長元九(二〇三六)年生まれで永承五(二〇五〇)年に入内した寛子の女房としては、こちらも疑いが残るように思われる。

⑥高倉一宮の中納言君

送或人、高〇一宮中納言君歌

ちはやふる神にも問はむ六年までこひぢにまどふ人はありやと

(一九八)

「高倉一宮の中納言の君」は、祐子内親王家の女房と思われるが、詳細は未詳。詠作年次についても未詳である。後朱雀天皇第三皇女祐子内親王(二〇三八―二〇五)は、母の中宮姫子(敦康親王女・関白頼通の養女)が妹の裸子内親王を出産後まもなく崩じたため、頼通の手厚い庇護を受けて育ち、頼通の高倉殿に住んだことから、「高倉一宮」と呼ばれた。数度の祐子内親王家歌合の開催も知られている。

なお、匡房が活躍した時代で「中納言の君」と呼ばれた女性は、「高陽院七番歌合(嘉保元年八月十九日)」にも出詠している。「殿の中納言の典侍」をはじめとして、歌合に複数見えるが、それらが同一人物かどうかも含めて詳しいことはわからない。

⑦小野宮の別当殿

内にぐし侍て、遅く侍る女に、小野の宮の別当殿に

百敷のことのしげさに夜は更けぬ錦の紐はとけやしぬらん

わが恋は音をのみ泣けばうたかたや衣に波のたたぬ日ぞなき

恋ひ恋ひてまれにあふ夜の床とはば千歳をへても明けずもあら

なん

(二四二―二四四)

「小野の宮の別当殿」は未詳。「女別当」ならば斎宮・斎院に奉仕した女官で、斎院裸子内親王家の「女別当」は同内親王家歌合の一部に参加している。また、治暦二(二〇六六)年五月五日の「皇后宮寛子歌合」に「別当」という女房が出詠しているが、これも斎院裸子内親王家の「女別当」か。また、当該歌詞書には「内にぐし侍りて」ともあるので、ここは「別当殿」と呼ばれた内裏女房か。内裏女房と考えると、興味深いことに、萩谷朴氏が『歌合大成』で裸子内親王家の別当の項で検討した人物の一人で、源顕房女の「別当殿」がいる。『中右記』承徳元年三月廿九日条に、

「行幸還御之後、初聞故六條右府姫君 号別当殿、内女房也、母并内女房 昨日死去、年初廿五云々、仍右大将一家人々服暇出来、行幸以後披露、有心之事也、件女房、民部卿爲檢非違使別当間被養子、仍号別当殿(以下略)」(傍線部は原文は割注)

という記録がある。この顕房女は内裏女房を母として生まれ、民部卿源俊明が檢非違使別当であった時にその養女となったので「別当殿」と呼ばれた、という。承徳元(二〇九七)年に二十五歳で死去したとすると、延久五(二〇七三)年頃に誕生した女性か。匡房の恋愛の相手としては時代的には合うものの、「小野の宮」を冠している点が疑問である。

「小野宮」と言えば藤原実資の邸宅が想起されるが、小野宮邸は実資の死後に実資女(千古)や養女(小野宮尼公、藤原懐平の外孫で中納言藤原祐家の妻)を経て、尼公の女へと女系で伝えられた。堀河天皇の時代には、関白師実四男の能実が、祐家女を妻とした関係で小野

宮邸に住んだらしいが、そうした事実とここに言う「別当殿」とは、何か関わるのであろうか。

⑧ 四条宮の大納言の君

四条宮の大納言の君のもとより

春風はよもにほへどわが宿の梅の立ち枝はとふ人もなき

かへし

君が住む梅の立ち枝のしるければにほひは袖にうつれとぞ思ふ

(一九五・二九六)

この「大納言の君」は、四条宮寛子女房の一人と思われるが、詳細未詳。参考までに、匡房の時代に「大納言の君」と呼ばれた女房たちには、

a、『出羽弁集』に登場する「大納言の君」で、当該箇所は永承六(一〇五二)年七月の記事と見られる。

b、『栄花物語』(松のしずえ)に見える「資房の宰相の女大納言の君」。延久三(一〇七二)年三月九日、後三条天皇の皇子実仁親王(母は源基平女基子)が生後初めて参内した記事に、皇子を抱き申し上げた女房として名が見える。

c、寛治七(一〇九三)年五月五日の「郁芳門院根合」に出詠した右方女房「大納言」(左大臣俊房女、郁芳門院女房)〔中右記による〕。

の三人がいる。このうちa・bの大納言の君が後に四条宮寛子のもとに出仕した可能性もなくはないが、ここに言う大納言の君とはみな別人である可能性のほうが高いのではないか。

以上、①～⑧で検討した女房たちは、四条宮寛子女房が四名、次いで内裏女房(内侍)が詳細未詳も含めて二名、内裏女房らしき女

性(別当殿)と祐子内親王家女房とが一名ずつである。これらの女房とその出仕先は、後半部に登場する堀河天皇時代に活躍した女房らとは、内裏女房を除けば、名前はもとより、出仕先も全く異なっている。

2、後半部に登場する男性たち

後半部は、『筑紫にて、さ月まであめふらぬに』の詞書を持つ三七五番から始まり、折々の詠、歌合の歌、代詠の歌、贈答等が続く。詞書に見える人名には、「左京大夫」(四四四番)、「左^新門のすけ」(四八五番)等、男性が見える。以下に整理して示す。

① 左京大夫(源顕仲)

左京大夫の、むすめに後れたるを、ほど経てとはんとある人にかはりて

その夢をとば嘆きやまさるとて驚かさでも過ぎにけるかな

(四四四)

この歌は「金葉集」(雑下・六一六)に、

顕仲卿むすめにおくれてなげき侍りけるころ、程へてとひにつかはすとてよめる

大藏卿匡房

その夢をとば嘆きやまさるとて驚かさでもすぎにけるかなと見える。

源顕仲(一〇六四～一一三八)は、村上源氏、右大臣源顕房の二男。母は肥前守藤原定成女。寛治七(一〇九三)年に刑部卿、康和四(一一〇二)年七月に非参議従三位、同十一月に任左京大夫。保安三(一

一二二)年二月に神祇伯を兼任、天治元(一二二四)年に左京大夫を辞す。堀河天皇の近臣で、堀河花壇を構成した一人。

当該歌は、康和四(二二〇二年十一月)匡房没(二二〇二年十一月五日)の間の詠。

②左衛門佐(藤原基俊)

九月つごもりに、人々あまたして、作文してのつとめて、

左〇門商のすけのもとより

ゆく秋をとどめつるかな奥山のもみちの錦たちやかへると

かへし

惜しめどもみぢも散りぬ日もくれぬ帰らじものを夜の錦は

(四八五・四八六)

当該贈答は『基俊集』にも、

九月つくるひ、大藏卿まさふさの卿のもとにつかはしける

ゆく秋をとどめつるかなおく山の紅葉の錦たちやかへると

かへし

をしめども紅葉もちりぬ日もくれぬ帰らじものを夜のにしきは

(二五四・二五五)

と見える。

藤原基俊(二〇五六―一二四二)は、生年に、天喜二(一〇五五)年説、

康平三(二〇六〇)年説もある。右大臣俊家男で、母は高階順業女。

歌人・歌学者として活躍したが、官位は、従五位上左衛門佐(若年

に辞した)。なお、当該歌の詠作年次は、『基俊集』詞書に「大藏卿

まさふさの卿」とあるところから、天永二(一一二二)年(匡房が大

藏卿になったのはこの年の七月)の九月三十日であろう。

③をこじの聖(雲居寺の聖、瞻西か?)

その年の師走のつごもりの日、をこじの聖のもとより

いにしへのたもとの露もかはかぬに添ふる涙をおもひこそやれ

かへし、三位殿

おもひやれかはく夜もなきわが袖の添ふる涙にくちはてぬべし

(四九四・四九五)

当該贈答は「卿の殿うせさせたまひて」として「京極のつどの」(令

子内親王家撰注)と「三位殿」の贈答歌に続くもの。「卿の殿」は匡

房で、「三位殿」は、匡房晩年の妻・藤原家子(堀河天皇乳母の帥三位)

と考えられる。詠作年次は、天永二年の師走晦日であろう。

瞻西(生年未詳―一二二七)は、陽明文庫蔵の『金葉集』勸物に「鎮

西人」云々とあり、延暦寺を経て東山の雲居寺を中心に活動した歌

僧。「基俊集」には五回も名が見え、顕仲ら廷臣歌人との交流もあつ

た。永久四(一一二四)年八月『雲居寺結縁経後宴歌合』等が知ら

れる。

参考として、「基俊集」の、匡房に一五四番歌を贈った日の歌に、

おなじ日、雲居寺にまかり侍りていそぎかへりしかば、瞻

西かくいひて侍りし

ゆく君がせめてをしきにくらぶれば秋は数にもあらぬなりけり

返し

まだ知らぬこん世ぞ今はたのまるる秋にもおぢず人の忍ぶに

(二五六・一五七)

とあり、瞻西と基俊との親密さがしのはれる。基俊・顕仲らとの親

交から見て、匡房との交流もあつても不自然ではないであろう。

以上の三人は、いずれも堀河朝期の歌人として、寛治年間から活

躍しているが、前半部には全く登場していない。

このほかに、後半部で最も重要な登場人物として、堀河天皇がいる。

やむごとなき人の、しのびてものおほせられけるほどに、
ほりかはの院、うせさせ給ひてのち、ひさしうおとづれさせ給はざりけるに、おとづれさせたまひたりけるかへりごと
とに、をんなにかはりて

夢とのみ思ひなしつつあるものを何なかなかにおどろかすらん

(四五三)

ほりかはの院に後れまゐらせて

かきくもり照る日のかげのくれしより天の下こそ悲しかりけれ

(四五五)

二首はどちらも堀河天皇崩御後の歌と明示している。天皇が崩御した嘉祥二(一一〇七)年七月、またはその翌年頃の詠かと思われる。

3、本論以前の「人物と詠作年次に関する考察」への補足

以前発表した前半部の人物と詠作年次に関する考察(7)に次の点を補足し、一部訂正する。主に、『江帥集』と、『類題抄』(8)に見える歌会、歌合の歌題との照合によるものである。

以下、『江帥集』は歌番号と詞書を、『類題抄』の記録はその通し番号、歌会の名称、年次等と題を示す。傍線部は原典では小字の注部分である。なお、『類題抄』を『類』と略記する。

①14番歌「まさなかの朝臣八条にて かきねの梅」は、「375刑部卿政長会 永保二(一一二二) 牆根梅花」。源政長の八条の家での詠であることは前論と同じ。前論では源政長の没年以前としか示すこと

ができなかったが、『類』により、永保二(一一〇八二)年か、或いは承保二(一一〇七五)年(浅田徹氏のご教示によれば、『類』は「承」を「永」と誤ることが少なくないため)の詠と知られる。

②14番歌「中宮のえむに、梅花ひさしくにほふ」は、「370白河院 永保三(一一二二) 於宮御方講之 梅花久薰」。中宮が白河天皇賢子である点、開催年次、ともに前論文を裏付ける。(日付を、『類』は十二日とするも、『永左記』によれば十六日である)

③23・24番歌「内大臣殿遠山桜有序」は、「395後二条殿于時内大臣 遥見山桜」。年次の記録はないものの、師通の内大臣の時期とした前論を裏付ける。

④51番歌「殿上にて あか月のほととぎす」は、「457白川院永保 暁尋郭公」。白河天皇時代の詠で、題が歌の内容に合致、年次も永保(一一〇八一〜八四)か承保(一一〇七四〜七七)の頃と知られる。

⑤68番歌「五月末 惜ほととぎす 人々きたりて詠む」は、「483匡房卿家永曆三五廿 惜郭公」。「永曆」は「承曆」の誤りで、承曆三(一一〇七九)年五月二十日の詠作と知られる。

⑥89番歌「鳥羽院の御くらゐの時、よふけてかりをきく」は、「519白川院承曆 旅中聞雁」。前論で指摘した他出(『続詞花集』和歌一字抄)のうち、『続詞花集』の題が適切であり、承曆の頃(一一〇七七〜八二)の詠作と知られる。

⑦94番歌「鳥羽院のくらゐにおはします時、御前にて、はやしのは、やうやうくれなるなり、といふことをよめる」は、「542白川院 林葉漸変」。詠作年次を絞ることは出来ないものの、題が他出にも見える「林葉漸紅」ではないことを確認し、同時詠である白河院の歌を見出すことができた。

林葉漸変といへる心をよませ給ひける 白川院御歌

ははそ原しぐるる数のつもればや見る度ごとに色かはらん

(統古今・秋下、五一五)

この白河院の詠は『秋風集』四二五番にも見えるが、『玉葉集』が匡房詠を採録するに当たり、天皇を鳥羽天皇と誤解していることは前論で指摘した。

⑧310番歌「春宮の御前にての哥、たげのかぜあめのごとしといふ題を 鳥羽殿」は、『528白川院于時東宮 風竹如雨』。詠作年次の記録はないが、同時詠と思われる藤原基長の歌(金葉、二六四)から、詞書末尾の「鳥羽殿」は白河天皇の東宮時代という意の注記であるとした前論を裏付ける。ただし、題が「風竹如雨」で、『金葉集』の「竹風如雨」とは多少異なり、こちらの「風竹如雨」でもう一首の同時詠を『和漢兼作集』(五一〇、藤原敦宗)に見出すことができるので、「風竹如雨」が正確な題であるようだ。藤原敦宗(一〇四三〜一一二)は実政男で、父に縁座して一時期は官を解かれたが、赦免後には文章博士、大学頭等を歴任、また関白忠実の家司を務めた。匡房より二歳下の儒者で、二人とも同年に亡くなっている。

4、『江帥集』の構成と成立

この集は、白河天皇と堀河天皇、そして鳥羽天皇のそれぞれの大嘗会に際して匡房が詠進した屏風歌・風俗歌をすべて含んでおり、そのことが集としての歌数を増している。簡潔に構成を示すと以下のとおりである。○内は歌番号。

a、前半部 別紙「一覽表」37〜40ページ参照

春(1〜49)・夏(50〜77)・秋(78〜118)・冬(119〜149)・
慶賀(150〜159)・行旅(160〜167)・離別(168〜175)・
哀傷(176〜185)・恋(186〜293)・雑部(294〜314)・連歌(315〜318)・
白河天皇大嘗会和歌(319〜346)・
堀河天皇大嘗会和歌(347〜374)

b、後半部

別紙「一覽表」40〜41ページ参照

雑(題詠・歌合の歌・恋歌・女への歌・代詠歌・贈答歌)(375〜495)・

鳥羽天皇大嘗会和歌(496〜523)

すなわち、前半部は、勅撰集に倣った部立てを示して整然と配列された歌の後に、白河、堀河二代の大嘗会和歌を置いている。

これに対して後半部は、前半部には入らなかったのだから歌、筑紫での歌、詠作年次のわからない歌合の歌、女性に贈った恋歌等、ある程度のまとまりごとに、一部は詠作年代順に並べてゆき、最後に前半と同じく鳥羽天皇大嘗会和歌を置く。

これまでの登場人物と詠作年次の考察から見て、前半部の歌は、白河天皇時代の歌を中心として、大宰府赴任中の康和三年頃までの歌であり、後半部は、堀河天皇時代の承徳年間以降の歌で、匡房の最晩年期の歌と匡房薨去後の贈答歌である。

前半部は、内裏歌合、高陽院七番歌合等の晴れの場の歌を重視して配列がなされ、詞書に登場する人物は、男女ともに白河天皇・堀河天皇時代を中心として、活動・生存ともに康和年間以前の人物が多く、詠作年次がわかる歌も、すべて康和四(一一〇二)年六月の大宰府からの帰京以前のものである。先行研究のとおり、匡房による自撰家集と考えられる。

後半部には堀河天皇の崩御を悲しむ歌があり、登場する廷臣二人

はともに匡房より二十歳近く若い世代である。女房らも堀河天皇の同母姉・令子内親王の女房（撰津、大式、肥後）を中心に、堀河天皇との関係が強い内裏女房（三位殿、周防内侍）である。後半部の詞書の一部には匡房に対する敬語の使用が見られ、匡房薨去後の贈答がある点からも、明らかに他撰による増補部分と考えられる。従って、この集の成立に関して結論を整理すると、次のとおりである。

①前半部は、康和四年六月に大宰府から帰京した後に、自撰によって、家集として一旦成立した。

②堀河天皇は、康和の頃に私家集を集めていた。

『二条太皇太后宮大式集』に、

うちに人々のしふめししに、まいらすべきよし、一宮の紀
伊の君のがり申しにつかはすとて

君にこそたづねてもみめ和歌の浦にたちつく波の跡はありやと

返し、紀伊の君

いかでかは和歌の浦波なごりありと雲の上までたちのぼるらん

（一八五・一八六）

とあり、また、『基俊集』の一〇六番歌左注には、

これは、堀川の院の御時召ししかばまいらせし、これより

後の歌は、いにしへいまのをかきあつめたるなり

とある。『大式集』の一八五・一八六番の贈答歌は、大式が主人の令子内親王に従って内裏の弘徽殿に住むようになり、堀河天皇が琴を弾くのを身近に聞いた感激の思いを詠む歌の次に位置しており、一首挟んで自身の集の跋文らしい部分もある。令子内親王が内裏に入ったのが康和四年十一月十七日である。『大式集』は跋文の後に堀河天皇の命で詠まれた「隠し題」の歌を九首補足して、長治二（一

一〇五）年に成立したと考えられる（9）。従って堀河天皇が私家集を収集する中で、大式が一宮紀伊に家集献上を促したのは、康和四、五年の頃のことと考えられる。『江帥集』前半部も、こうした動きの中で、大宰府から帰京した匡房が堀河天皇の叡覧に供するために自撰したのであろう。

③後半部は、匡房没（二二二年十一月五日）後に、匡房が遺しておいた和歌資料を、身内が追加した増補部分であろう。増補を行った身内とは、妻の「三位殿」（藤原家子）（10）、および家子の連れ子であった藤原家保などの可能性が高いように思われる。最末尾の鳥羽天皇大嘗会和歌群の直前には、家子に対応した匡房没後の弔問の贈答歌（二組）があることが、この想像の根拠である。増補が行われたのは、家子の主動であるならば匡房没後まもなく、家保によるならば永久五（一一二七）年二月の家子没後まもなくのことであるのかもしれない。

和歌の引用は、特に断りのない場合は『新編国歌大観』『新編私家集大成』により、適宜、オドリ字を仮名にし、濁点と読点を付し、漢字を当てている。

注

- 1、拙稿「『江帥集』後半部に関する二、三の考察」『大式集』作者と匡房、「三位殿」と匡房」（都留文科大学研究紀要 第82集 二〇一五年十月）、『江帥集』前半部について―登場人物と詠作年次等の考察（1）―（罹麦第三十号 日本女子大学日本文学科・罹麦会 二〇一六年三月）、『江帥

- 集』前半部について―登場人物と詠作年次等の考察(2)―」(瞿麦 第三十一号 日本女子大学日本文学科・瞿麦会 二〇一七年三月)
- 2、有吉保『江帥集』解題』(『私家集大成 中古Ⅱ』明治書院 一九七五年)及び「同」(『新編 私家集大成』エムワイ企画)。
- 3、竹下 豊『晴の家集―堀河百首歌人の家集を中心に―』(『王朝私家集の成立と展開』一九九二年 風間書房)。
- 4、冷泉家時雨亭叢書 第十八卷『平安私家集 五』(朝日新聞社 一九九七年)による。
- 5、磯水絵『大江匡房―碩学の文人官僚―』(勉誠出版 二〇一〇年)による。
- 6、5に同じ。
- 7、拙稿『江帥集』前半部について―登場人物と詠作年次等の考察(1)―』(『瞿麦 第三十号 日本女子大学日本文学科・瞿麦会 二〇一六年三月)
- 8、『類題鈔(明題抄) 影印と翻刻』(『類題鈔』研究会 平成六年 一月 笠間叢書261)
- 9、塚谷多貴子『皇后宮令子歌壇論―金葉集期の女流歌壇―』(北海道大学『国語国文研究』五二号 一九七四年十一月)の注。
- 10、拙稿『江帥集』後半部に関する二、三の考察―『大式集』作者と匡房、『三位殿』と匡房―(『都留文科大学研究紀要 第82集 二〇一五年十月』参照)。

(追記) 本稿は、「和歌文学会 五月例会」(二〇一七年五月二〇日(土)、於学習院大学)における口頭発表を中心にまとめたものである。発表の席で、また後日にもご教示を賜った先生方に深く感謝申し上げます。

受領日 二〇一八年一〇月二日
受理日 二〇一八年一月七日

『江帥集』の人物（一部は場所）・推定される詠作年次の一覧

番号	詞書（人名・場所などを中心に）	人物・場所の特定または推定	詠作年次
2	承暦二年四月廿八日殿上歌合 右	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2（1078）年4月28日
3	同卅日後番歌合 霞	承暦2年4月30日内裏後番歌合	承暦2（1078）年4月30日
8	承暦二年四月卅日後番歌合 右方 子日	同上	承暦2（1078）年4月30日
10 11	於大宰府詠之 かすみ	大宰府 権帥在任中 (33 45 134 140 141 142 147 171 313 等も「筑紫にて」)	承徳2（1098）年9月～ 康和4（1102）年5月頃
14	まさなかの朝臣、八条にて	源政長（1038～1097）	永保2（1082）年2月か
15	鳥羽院、位におはします時、殿上	白河天皇	在位1072年12月～ 1086年11月
16	中宮の宴に「梅花久しくにほふ」	白河天皇中宮賢子	永保3（1083）年2月16日
20	これいへが長楽寺にまかりて	藤原伊家（1041～1084）	1084年以前
23	内大臣殿「遠山桜」有序	藤原師通（永保3（1083）年正月任）	1083年正月～ 寛治8（1094）年
26	鳥羽院にて、山の桜をたづぬ題を	白河上皇 鳥羽殿か	鳥羽殿造営（寛治元（1087）年）以後か
27	六条内裏に、花契退年	白河天皇時代、六条内裏	在位1072年12月～1086年11月
28	京極殿のみゆきに、花	白河院の京極殿（師実邸）御幸	嘉保3（1096）年2月22 ～23日
29	中宮の宴に、花千年をちぎる 有序	堀河天皇中宮篤子	嘉保3（1096）年3月か
39	関白殿の五番歌合 花持	藤原師実（高陽院七番歌合）	寛治8（1094）年8月19日
40	承暦二年四月卅日後番歌合 花	8番に同じ	承暦2（1078）年4月30日
42	美作守にてよめる、暮るる空の落つる花	美作（延久6（1074）年正月任）	1074年7月～ 承暦元（1077）年
52	郭公 後番歌合殿上	承暦2年4月30日内裏後番歌合	承暦2（1078）年4月30日
53	六条院の根合に 左	郁芳門院根合 六条院	寛治7（1093）年5月5日
54	関白殿の五番歌合	藤原師実（高陽院七番歌合）	寛治8（1094）年8月19日
56	承暦二年四月廿八日歌合殿上 菖蒲	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2（1078）年4月28日
58	後番歌合殿上 五月雨	承暦2年4月30日内裏後番歌合	承暦2（1078）年4月30日
76	庭の木葉を結ぶ 院の位におはします時、三条内裏にて、題者経信	白河天皇 三条内裏 「庭樹結葉」	応徳元（1084）年4月19日
78	あき、斎院の野の宮（左注「この歌はつねひらの朝臣所來感也」）	斎院は斎宮の誤りか。媞子内親王。 藤原経衡（1005頃～1078以後）	承暦3（1079）年9月8日～ 承暦4（1080）年9月15日か
79	みちむねの朝臣、八条にて、たなばた	藤原通宗（生年未詳～1084）	1084年以前
84	鳥羽院にて、山家秋の心を	白河院	鳥羽殿造営以後、未詳
89	鳥羽院の御位の時、夜更けて雁を聞く	白河天皇	在位1072年12月～1086年11月
90	鳥羽院の「遠く萩の花を思ふ」内直盧	白河天皇または白河院、内裏	未詳
92	関白殿の八月十五夜	関白は師通か	永長元（1096）年8月15日か

93	信濃守もろみつ、この歌を見て、	源師光 (生没年未詳 清和源氏) 永長元 (1096) 年 6 月 任信濃守	永長元 (1096) 年 8 月15日頃か
94	鳥羽院の位におはします時、御前にて	白河天皇	在位1072年12月～1086年11月
95	後三条院御時、殿上人、「船の中の月」	後三条天皇	在位1068年4月～ 1072年12月
96	大殿、九月十三夜	大殿は藤原師実か	未詳
98	ためなかの朝臣、終夜見月	橘為仲 (生年未詳～1085)	1085年以前
99	承暦二年四月廿八日殿上歌合、月	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2 (1078) 年 4 月28日
100	宇治殿の扇合の歌 左方	四条宮寛子扇合 宇治殿	寛治3 (1089) 年 8 月23日
101	関白殿の五番歌合 月勝	藤原師実 (高陽院七番歌合)	寛治8 (1094) 年 8 月19日
102	鳥羽殿の「池の上の月」	白河院	鳥羽殿造営以後、未詳
104	六条院の萩 左	郁芳門院前裁合 鳥羽殿	嘉保2 (1095) 年 8 月28日
111	もみぢ、承暦二年四月廿八日殿上歌合	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2 (1078) 年 4 月28日
112	美作の国にて、山里のもみぢ	美作 (延久6 (1074) 年正月任)	1074年7月～ 承暦元 (1077) 年
113	中宮菊契退年 有序 鳥羽院	中宮は白河天皇中宮賢子	永保2 (1083) 年 9 月か
115	宇治殿の歌合、もみぢ	四条宮寛子扇合 宇治殿	寛治3 (1089) 年 8 月23日
116	よりつなの朝臣、津の国に羽束山 為贈詠不能送、早卒故也	源頼綱 (1024頃～1097)	頼綱の死去した頃 (1097)
121	後番歌合、承暦二年四月卅日殿上、雪	承暦2年4月30日内裏後番歌合	承暦2 (1078) 年 4 月30日
122	美作にて、深き山のあられ	美作 (延久6 (1074) 年正月任)	1074年7月～ 承暦元 (1077) 年
123	関白殿の五番歌合に、雪	藤原師実 (高陽院七番歌合)	寛治8 (1094) 年 8 月19日
124	鳥羽院大井河の遊宴	白河院	寛治5 (1091) 年10月か
130	左大臣宰相中將とき、池水鏡に似たり六条	源俊房 (1035～1121) 村上源氏 天喜5 (1057) 3月任参議左中將	天喜5 (1057) 年冬～ 康平4 (1061) 年12月
131	後三条院御時、大井河の逍遙	後三条天皇	1068年冬～1072年12月
132	鳥羽院の御位の時、殿上、暁の天雪	白河天皇	在位1072年12月～1086年11月
133	大井河の行幸	白河天皇	承保2 (1075) 年 2 月 または、承保3 (1076) 年10月
139	旅の宿りの雪 鳥羽殿	白河院	鳥羽殿造営以後、未詳
150	慶賀 松契遊 (退か) 年 齋院	齋院は令子内親王か	未詳
153	承暦二年四月廿八日、殿上歌合、祝	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2 (1078) 年 4 月28日
155	関白殿の五番歌	藤原師実 (高陽院七番歌合)	寛治8 (1094) 年 8 月19日
156	鳥羽殿の松影浮水	白河院 鳥羽殿	寛治元 (1087) 年11月
157	鳥羽殿の春宮と申しし時、殿上、松歌在序	白河天皇の春宮時代 延久元 (1069) 年 4 月立坊	延久元 (1069) 年 4 月～ 同 4 (1072) 年12月
158	中納言になりたるに、伯の母の許より	伯の母 (筑前守高階成順女)	寛治8 (1094) 年 6 月

『江帥集』の構成と成立

161	下向美作間、於二見浦、曉聞郭公ヲ	美作下向時か 169参照	延久6 (1074) 年7月
168	離別 大宰下向、於鳴尾送京洛	大宰府下向時	承徳2 (1098) 年9月
169	七月に美作へ下るとて	美作下向時	延久6 (1074) 年7月
176	あひしりたる女の五月にうせて……前の齋院の美作の君のとぶらひたる	「あひしりたる女」は妻か 前齋院の美作(祿子内親王家女房)	承保4 (永承元) (1077) 年冬か
178	後三条院に後れたてまつりての年、円宗寺にて	後三条院、 円宗寺	延久5 (1073) 年 後三条院崩御 以後の秋
179	基忠卿薨送之	藤原基忠 (1056~1098) 師実の孫	承徳2 (1098) 11月17日以後
182 183	夢中奉見故博陸殿	故博陸殿は藤原師通 (1062~99) をいうか	康和元 (1099) 年6月28日以後 歌内容から見て秋以降か
184	親に後れてのち、いもうとに別るとて	親は母親(宮内大輔橘孝親女)か 母は永長2 (1097) 年10月死去	永長2 (1097) 年10月 以後 大宰府下向時か
185	関白殿薨給後	この関白は藤原師実か	康和3 (1101) 年2月13日以後
186	恋 承暦二年四月廿八日、殿上歌合右方	承暦2年4月28日内裏歌合	承暦2 (1078) 年4月28日
189	因幡の内侍のもとへつかはす	因幡の内侍(生年未詳~1134 因幡守藤原惟綱女) 寛治元年12月内侍	寛治元 (1087) 年12月以降か
190	与州掌侍許送之	伊予の内侍(未詳)か	未詳
193	資成朝臣むすめを相いども間、下野守よしつなに逢ひぬと聞きて	橘資成(生没年未詳 1086年出家) 下野守義綱(源義綱)(生没年未詳)	義綱の下野守は承暦元(1077)年~同4(1080)年頃
196	四条宮のあはぢの君に	四条宮寛子女房淡路(生没年未詳)	未詳
198	送或人、高倉一宮中納言君歌	高倉一宮(祐子内親王 1038~1105) 中納言君(祐子内親王家女房)	未詳
199	高房朝臣女契間、彼朝臣卒去後送件女許	源高房(生年未詳~1077)	承暦元(1077)年9月 卒去後
202	孝定朝臣むすめのもとにつかはす、たちまの君	孝定朝臣(未詳) 但馬君(未詳)	未詳
215	宮のみまさかの君のもとへつかはす	四条宮美作(寛子女房 美作守源資定女)、176の前齋院美作に同じ	未詳
242	内にぐし侍りて、おそく侍る女に、をの宮の別当殿に	小野の宮の別当殿(未詳)	未詳
295	四条の宮の大納言の君のもとより	四条宮の大納言君(寛子女房 未詳)	未詳
305	もときよの朝臣に履を履き替えられて…	源基清(生年未詳~1086)か	源基清ならば1086年10月以前
307	美作守にて侍りしほどに、源縁法師、西国へまかるとて、糧などこふに…	源縁法師(生没年未詳 延暦寺僧『後拾遺』及び『金葉』歌人)	1074年7月~ 承暦元(1077)年
308 309	後三条院に後れ奉れる年のつごもりに、住吉の神主国基	後三条院(1034~1073) 津守国基(1026~1102)	延久5 (1073) 年12月晦日

310	春宮の御前にての歌、「竹の風雨の如し」といふ題を、鳥羽殿	春宮は白河天皇 (同時詠らしき藤原基長の歌あり)	延久元 (1069) 年4月～ 同4 (1072) 年12月
311	皇后宮の美作の君のもとより、千種殿に居たる人の公事ゆるせとて	皇后宮の美作君 (176・215に同じ) 匡房の千種殿の購入は承暦元年12月	承暦元 (1077) 年12月15日以後
313	政長朝臣八条長歌尋可書冬夜長歌、筑紫にて	源政長 (1038～1097) 14に同じ 313は大宰府赴任中の詠	承徳2 (1098) 年9月～ 康和4 (1102) 年5月頃
319 ～ 336	大嘗会主基方和歌 丹波国 承保元年于時為美作守 御屏風六帖四尺十八首	白河天皇 大嘗会	承保元 (1074) 年11月
337 ～ 346	風俗歌十首	同上	同上
347 ～ 364	堀河院の位につかせ給ふ折の歌どもなり 悠紀方 寛治二年于時為左大弁 近江 四尺屏風 従三位左大弁兼勘 解由長官式部大輔	堀河天皇 大嘗会	寛治元 (1087) 年11月
365 ～ 374	風俗歌十首	同上	同上
375	筑紫にて、五月まで雨ふらぬに…	大宰府在任中	承徳2 (1098) 年9月～ 康和4 (1102) 年5月頃
411	師走のつごもりに……三位殿に	三位殿 (常陸介藤原家房女 家子)	承徳2 (1098) 年以降か
444	左京大夫の、娘に後れたるを…	源顕仲 (1064～1138) 左京大夫は康和4 (1102) 年11月～	康和4 (1102) 年11月以降
445	周防の内侍、尼になりぬと聞きて遣はしたるに、昨夜うせさせ給にきとぞ…	周防内侍 (生没年未詳 平棟仲女、正五位下仲子) 450・451も同	康和4 (1102) 年6月以後、 天永2 (1111) 年11月5日以前
446	京極の大式殿のもとより、思ふ人あまたに後れたるに、とはせ給はぬを恨みて	京極の大式 (令子内親王家大式 生没年未詳 若狭守藤原通宗女) 448も同	未詳 1111年11月5日以前
453	……ほりかはの院、うせさせ給ひて後、久しうおとづれさせ給はざりけるに…	堀河天皇 (1079～1107) 455も同	嘉承2 (1107) 年7月19日以後 天永2 (1111) 年11月5日以前
470	京極のつの君のもとへ遣はず	京極の撰津 (令子内親王家撰津 生没年未詳 陸奥守藤原実宗女)	未詳 1111年11月5日以前
472 ～ 480	七月七日、又、つどのへ遣はず	同上	同上
481	六条院のほりかはどのの、集作られたるを、ゆかしがりて、人にかはりて	六条院の堀河 (都芳門院堀河 右大臣藤原俊家女)	未詳 1111年11月5日以前
483 484	大蔵卿にてありし折、常陸に切りもの当たりて、これほかに、など言ひしを、遠江に切り替えたりしかば…	483の作者は、令子内親王家肥後 (常陸とも 藤原定成女)。 匡房の大蔵卿任官は天永2年7月	天永2 (1111) 年7月29日～ 同年11月5日の間
485 486	九月つごもりに、人々あまたして作文してのつとめて、左衛門のすけの許より	藤原基俊 (1056～1142) 「基俊集」154・155に同じ	天永2 (1111) 年7月29日～ 同年11月5日の間

『江帥集』の構成と成立

492	卿のとのうせさせ給ひて、三七日ばかりありて、京極のつどのの御もとより…	「卿の殿」は匡房 京極の摂津（令子内親王家摂津）	天永2（1111）年11月末頃か
493	かへし 三位殿	三位殿（411に同じ 匡房の後妻）	同上
494	その年の師走のつごもりの日、をこじの聖のもとより	「をこじの聖」は雲居寺の瞻西か	天永2（1111）年12月末
495	かへし 三位殿	493に同じ	同上
496 ～ 513	鳥羽院大嘗会悠紀方和歌 近江国 天仁元年十一月 日 為大宰権帥 四尺御屏風六帖和歌十八首	鳥羽天皇 大嘗会	天仁元（1108）年11月
514 ～ 523	風俗歌十首	同上	同上